鳴門の旅

苫小牧市医師会
同樹会苫小牧病院
水島　康博

2019年９月、徳島県鳴門市を夫婦で旅をした。目的は､「大塚国際美術館」と「鳴門のうず潮」である。

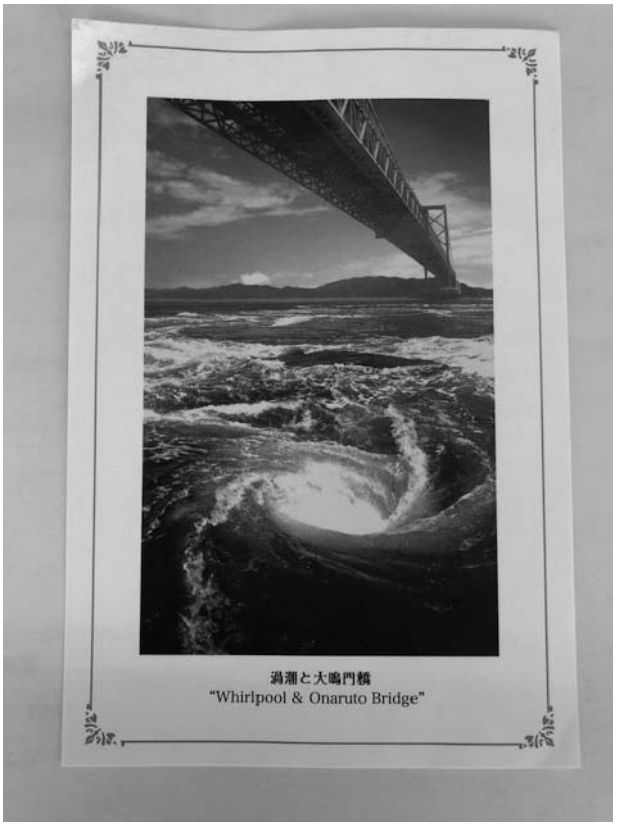
大塚国際美術館は世界初の陶板名画美術館で原寸大の名画の数々に圧倒された。オリジナル作品と同じ大きさの複製画が1,000余点展示され、一日ではとても観きれなかった。陶板画は約2000年以上にわたってそのままの色と姿で残るので、これからの文化財の記録保存の在り方に大いに貢献しそうである。

鳴門は、大塚製薬の創業者　大塚武三郎氏の育った地であり、1998年大塚製薬創立75周年記念事業として大塚国際美術館は設立された。鳴門海峡の白砂をコンクリートの原料として採取し販売していたが、これをタイルにし販売することを思いつき、陶板画の作製につながったとのことだった。お土産として陶板画のミニチュアであるがフェルメールの「真珠の耳飾りの少女」とミレーの「落穂拾い」を買った。毎日眺めているが常に新鮮で見飽きることがない。

鳴門海峡は、鳴門市の大毛島の東北端孫崎と淡路島の門崎との間、約1,300メートルの狭い瀬戸である。この海峡を境として潮の干満により瀬戸内海側と紀伊水道側とに潮位の差が生じ、それが速い潮流となり複雑な海底の地形とも相まってうず潮ができるとのこと。激しい潮流のあることから鳴門（鳴る瀬戸）の名が生まれたと言われている。大きな渦は直径20メートルにも達するとのことだったが、残念ながら今回は大きな渦を見ることはできなかった。渦には右巻き、左巻きがあり、右巻きが多いとのことだった。

目的は果たせたが、もうひとつ気になったのは、鳴門がアジアで初の「第九」の演奏地であったことである。演奏会はドイツ兵によってなされた。なぜ鳴門にドイツ兵かと言うと、第一次世界大戦が始まると、日本も参戦し、ドイツの租借地だった中国の山東半島にある青島を攻撃した。敗れたドイツ兵士は約5,000人が俘虜となり、日本各地の収容所へ送られた。その内、四国の徳島、丸亀、松山にいた約1,000人が1917年から1920年までの３年間を鳴門の板東俘虜収容所で過ごした。地域の人々は、俘虜たちの進んだ技術や文化を取り入れようと牧畜･製菓･西洋野菜栽培・建築・音楽・スポーツなどの指導を受けた。収容所での俘虜たちの活動は実に多彩だった。音楽面では、複数のオーケストラや楽団、合唱団が定期的にコンサートを開き、さまざまな曲を演奏した。なかでもベートーヴェンの交響曲第９番（第九）をアジアで初めて全楽章演奏したことは有名になっている。

折しも1918年、日本でもスペイン風邪の感染爆発が始まった。鳴門でも流行したがドイツ兵の感染対策の知識が大いに役立ち、この地区の死亡者はほとんどいなかった。戦後1972年、ドイツと板東の友好の懸け橋としてドイツ館が造られ、1993年には新しいドイツ館が完成した。そこでは、当時のドイツ兵の暮らしや板東の人々との交流の様子や「第九」の演奏の様子が展示されている。

スペイン風邪から約１世紀を経て世界中に新型コロナウイルスが到来した。今の日本の状況は100年前の世相と通じるところがある。例えば、1919年に愛媛県が作成した「予防心得」５点セットは、「病人の隔離」･「人混みの回避」･「マスクの着用」･「うがいの励行」･「子供と老人の注意」だった。これに「手洗いの励行」を加えれば、現在の新型コロナウイルス感染症対策とほとんど変わらない。当時は流水で手洗いのできる環境になかったのだろう。

現在の新型コロナウイルス感染症対策で最も大事なことは「手洗いの励行」と「顔にさわるな」である。